

---

# 東方無人譚

K Y O

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方無人譚

### 【NZコード】

N3540K

### 【作者名】

KYO

### 【あらすじ】

何の前触れも無く死んだと思えばよくわからない場所に飛ばされてしまった、無い無い尽くしの青年。

飛ばされた先は・・・え? 東方なの? 違うの?

## 第1話『無』の人

本日、俺は何の前触れも無く交通事故でその生涯を終えてしまった。

と思ったのだが、気が付けばよくわからない暗い森に立っていた。

よし、まるで意味がわからない。

死んでからここに来る合間に天使とか神様とかと遭遇していたら二次創意的な意味で転生や異世界移動だと断言できるものの、そんなものは何も無かつた。

ということはここは死後の世界でいいのだろうか？ 暗いのは夜だからか？ それとも死後だからか？

そうだとすると、俺は結局何の面白みも無い人生を歩んでしまったようだ。

名前は神無月零という神も居なければ数字も無い名前だし、友達も居なければ恋人も居ない。

親も居なければ勿論親の形見も無い。運動能力や学習能力は皆無ではなかつたがごくごく普通・・・つまり特徴が無かつた。

まさしく無い無い尽くしの俺の性格はやる気もあまり無く、周囲の人間曰く『主体性が無い』というか、周囲に流れまくってる人間だよね』とのこと。

- ・・・こうして思い返すと本当に何も無い俺。趣味はせいぜい漫
- 画とゲームくらいだがオタクといえる程のめり込んではいなかつた。と言つたがゲームは国民的RPGと某ナイスミドルが活躍するACT、そしてたまたまネットで知つて嵌つた東方projectくらいだ。あ、東方だけはやりこんでるから俺の人生何も無いわけじゃなかつたか。まあ東方しかないとも言える訳だが。

- ・・・どちらにしろ何も無い人生を送つてたんだ俺は。死んだ後
- といつも更過ぎる状況ながら、もうちょっと何か特徴のある人生を

歩んでみたかった。

まあ死後に辿り着いた場所が三途の川じゃなくて森つてことは特徴があるか。死後だけ本当に何も無いよりはマシ……あ、今更過ぎるけど俺足があるじゃん。幽霊じゃないの？

「んー、じゃあ夢遊病にでもなったのか？唯一の特徴が夢遊病とか勘弁なんだが」

とりあえずちゃんと自分の体を確認するためにあちこち見て触つてみる。

右手で腹に触ると体に触る感触が……無い？といつも胴体部分が煙のように崩れた？……んでほっとくと戻ると。

これは幽霊でいいのか？しかしこの現象は明らかに幽霊つてイメージじゃないよな。

どちらかといふと幽霊と重なって、アレ、あの漫画のキャラ……そう、アライブの広瀬みたいな感じだよな。この見た田のふわふわ感。

……広瀬？ちょっとまた、広瀬つて確かに『無力感』が原因で『無』の力を手に入れたんだよな？

で、俺は色々と『無』にまみれた人生を送つていて……うわ、なにこの符合。俺いつのまに能力者になつたんだよ。

いや落ち着け。まだ断言するのは早い。まずは能力を解除して実体がある状態に戻れるかどうかだ。広瀬は出来てたから、これで俺が不可能だつたら幽霊つてことになる……かもしれない。

しかしどうすればいいのか……とりあえず念じてみるか。

「戻れ……実体化しろ……セービングだ！」

……いや、確認するまでもないんだよね。明らかにセービングだと体の感覚が違うし、足が地に付いてる間隔があるし。

ということは俺は本格的に広瀬と同じ存在に……いやいや早合点はいけない。ここは冷静に事を進めるんだ。

さて思い出そう。広瀬といえば無を飛ばして色々消し去る攻撃を使つていた。

ということは、俺が似たような攻撃を試してみて可能だつた場合、本格的にアクロの心臓の器になる運命を持つてゐるということになる。心臓存在するかわからないけど。

とこうことで試してみよう。

「でもこれも念じるだけで何とかなるのか？……とりあえず、何か球体っぽい感じでイメージを……」

右手を前に突き出し、掌を上へと向けて球体を形作るよひにイメージする。

・・・うん、イメージが弱いのかぎゅっと歪だけど、色を持たない形の歪んだ球体が出来上がつた。目に見えない筈なのにそこにあるのがわかるのはやつぱり俺が作り出したからなんだろうか？  
とりあえずすぐそこに乱立してゐる木に投げつけてみた。・・・そのままその球体の形に木の一部が消滅してしまつた。そのまま大量の木を消滅させながら直進して行つてゐる。  
わーいやつぱり広瀬と同じだー・・・

「じゃねえー？消える消えるーー！」

消滅を念じると無の球体が消え去つたのを何となく認識できた。そして残つたのは抉れまくつた木々。

うーむ、大輔の『再生と死滅』の能力があれば再生できただけど、俺は『無』だし諦めてもらおう。まさか大輔と同じ能力者まで近くにいるわけが無いだろ？じ。遠くならわからんけど。

しかし、死んで幽霊になつたかと思えば死んで無くて能力者になつてるとかどういうことなの？まったくもつて意味がわからないんだけど。

まさか何の前触れも無く憑依やら転生でもしたんだろうか。これも大概とんでもないが、ここまで意味がわからないことが続いているとむしろそれくらいの事が無ければ納得できない。

まあ俺が能力を手に入れたのか、俺が広瀬に憑依したのかは森から出て町を見るなり、水や鏡で顔を見るなりすれば解決するだろう。もそ俺のままなら能力を見つからないように活用しつつ生活すればいいだけだしな。ここまで特別なことがあればもうあとは何時も通り特別なことの無い人生で文句ないし。

んじゃ、とりあえず移動を開始してみよう。・・・せつかくだから能力で実体を無くしてふわふわ飛んでいくか。

そのままふわふわと森を進んで1時間くらい経つただろうか。とりあえず月は確認できた。

俺は未だに森の中に居て・・・何やらそこらに生えているキノコが不穏な胞子をばら撒いてたり、よくわからない何かを感じたりとう明らかに危険であろう場所を進んでいた。

しかしこの胞子とかは元々危険が無いのか、はたまた俺の能力が『無』のおかげで何も影響が無いのか・・・実体化して確認したらわかるかもしれないが、怖すぎて確かめる気になりません。

いい加減誰かに会いたい。1人は慣れてるので寂しくは無いんだが、流石に不安になる。

俺このまま遭難しないよな・・・?なにやら空腹にもならないし疲れもないからそれは無いか。しかし不安だ。

最初居た辺りでは鳥の声とか聞こえてたのに、この魔の森としか言えない様な場所に入つてから生き物の気配がまったくしないんだが。

なんで俺はここに踏み込んだ時に引き返せなかつたのか・・・

「・・・ん？ 胚子とかが薄れてきてるな」

もしかしたら魔の森を横断（または縦断）してしまつたのかもしない。それはそれで助かるんだが、出来れば人が居る場所に行きたい。

いや、もう人じゃなくてもいいや。妖怪でも幽霊でも何でもいいから誰か来てくれないものか。・・・まさかここには俺しか居ないなんて事は無いよな？

「ねえ」

「うわっ！？ だ、誰だ！ びっくりするじゃねえか！ でも出てきてくれてありがとうございます！ 助かりました！」

「よくわからないけど、そーなのかー」

きょりきょりと辺りを見回してみるが・・・誰も、居ない？ よーし落ち着け俺。俺が言つたんだからな。幽霊でもいいと。だからここはちゃんと受け入れなければ。よーし深呼吸だ。吸つてー、吐いてー。

「えーと、ど、どこから話しかけてくれてるんでしょうか？」

「気付いてなかつたの？ 上だよ」

ほつ、上とな？

たとえ幽霊でも半透明の姿くらいは見えるだろ？ と思つて、少女のよくな声で話す幽霊が示した方向へ首を向ける。

「で、聞きたい事があるんだけど・・・」

そこには月光を受けた金色の髪を風に靡かせ、両手を広げながら宙に浮いている黒い服の女の子 - - -

「 - - - 貴方は、食べても良い人類？」

- - - 僕が嵌っていた東方 project の『東方紅魔郷』に登場する宵闇の妖怪・ルーミアと瓜二つの少女が、可愛らしい笑顔を浮かべながらそこにいた。

え？ アライブじゃなくて東方なの？

## 第1話 「無」の人（後書き）

さて、新作始めてしました。  
何してるんだろうね俺。  
他にもSSあるのに。

## 第2話 IJの世界との世界？

さて、アライブな能力を手に入れたと思つたら東方っぽい娘が現れた。

この流れは一次創作SSS的に考えて、『他作品の能力を手に入れて異世界へ』といった感じだろうか。

なら俺の能力は『無』じゃなくて『無を操る程度の能力』か？いや、そこまで強力でも無いか・・・でも東方設定では能力が進化したり変質したりする事もあるらしいし、もしかしたらチート級な能力に進化するかもしない。

いや、多分現時点でもよっぽどチートなんだろうけど。何せ殺意すらない一撃必殺の攻撃に、弾幕ゲーの意義を破壊してしまつ無敵処理が常時展開されてるんだし。

・・・あれ、これって俺弾幕ごつこ出来ないよな？まさか弾幕ごつこで不可視の必殺弾幕を放つわけにはいかないし。これは困った。というかよくわからん場所に飛ばされてルーミアに出会うとか、明らかに幻想入りテンプレだよな。

「ふうん、無視するの？まあいいわ、大人しく私に食べられちゃうてね」

ルーミア（仮）を見て硬直しながら脳内で様々な思考を続けていると、いきなり複数の妖弾を飛ばしてきた。

びっくりしてしまい回避が遅れた。というか戦闘なんて慣れてる訳が無いのですぐに行動できても避けられないだろうけど。

というわけで、妖弾は俺の胴体に直撃した。怪我も無く体が解けるだけだけどな！すぐに元に戻るし。

「あれ？妙に靈力が高いと思ってたけど、能力持ちだつたんだー。」

しかも結構強力みたいだし・・・」

あ、俺靈力あつたんだ。なら靈力の使い方を学べば弾幕「」出来  
る様になるのかな？

と、襲われるのにのんびりと考え方が出来るのは俺の能力がチー  
トだと理解できているから。じやなきや今頃咽び泣きながら土下座  
してゐ頃だ。

しかし、このルーミア（仮）にはどこか違和感がある。何がが違う  
感じなんだよな・・・実はルーミアの親戚とか？いや一人一種族の  
妖怪だつたはずだからそんな事は無いか。

「なあ、あんた名前は？」

「そんな事聞いてどうするの？・・・ま、いいや。ルーミアだよ」

やはりルーミアだつたらしい。じやあこの違和感はいつたい何なん  
だろうか。

どう見てもおかしな所なんか存在しないし・・・つて、ああ！？リ  
ボンが無い！？じやあまだ封印されてないのか！？

畜生、EXルーミア肯定派の俺としては封印されていない状態でも  
外見が変わらないのは残念すぎる。アダルトルーミアが凄まじい力  
を振るううううとか大好きだつたんだけどなあ。

・・・ちなみに、俺がこうして色々考へる間にもルーミアは攻撃  
してきてる。おかげで全部位それぞれ一回は形が崩れている。顔  
が崩れると視界も気持ち悪いことになつた。目が分裂したら多分こ  
んな感じなんだろう。

「もう、よくわからないけど面倒な能力ね。せつかく油断させて遊  
ぶ為にこんな姿になつてゐるのに怖がりもしないし。本気になつちや  
うんだから！」

え？ 本気つて何？ と聞き返そうとしたが、その言葉は俺の口から出る前に消え去った。

俺とルーニアの周りで起きている怪現象。まるでそこら中から闇が集まっているような感じで・・・ 実際全ての闇がルーニアへと集っている。

これは・・・ EXルーニアフラグか！？

ルーニの周り集まつた闇はどんどん凝縮されてゆき、人の形に纏まる

と軽く弾けて闇が辺りに溶けていった。

そこから現れたのは、圧倒的オーラを放つ絶世の美女。

夜空に浮かぶ満月の様に輝く長い金髪を腰の辺りまで伸ばし、黒を基調に赤で装飾されたシックなドレスで身を包んだその姿は、妖怪というよりも女神の様で・・・

「やべえ、凄く強そう。俺の能力で対処出来るのかこれ？」

物凄い不安になつた。だつてオーラがやば過ぎる。カリスマ溢れまくつてるし、何か妖力っぽいのが視認出来る位になつてるし。

「この姿に戻るのも久しぶりね・・・ ああ、楽しませて貰うわよ？」

うわあ、やばい。もの凄い危険を感じる笑みなのに美人過ぎてどうでもよくなつてくる。口調も大人っぽくなつてるし。何故か従いたくなつてくるが、やつぱりこれがカリスマなんだろうか。成程、畏れとはこういう物を言うのか。こりや確かに従わざるを得ない。他人を従わせるんじやなくて他人が勝手に従つてくるのが真のカリスマなんですねわかります。

しかし楽しませると言われてもどうすればいいのか。俺戦闘なんか出来ないし、とりあえず逃げ惑えばいいのか？ まさか『無』で攻撃するわけにもいかんだろうし・・・ だつてルーニアが好きなんです。

「・・・何なのよその能力！原初の闇で包み込んでも吸収も出来ないとかおかしいわよ！」

気付けば首から下が全部闇に包まれてました。道理で体の感覚がかしたことになつていていた訳だ。

でもこれで、EXルーミアでも俺の『無』の体を害する』ことが出来ない』ということが判明した。やっぱりチートすぎまる。さつきからルーミアが闇で作った針とか剣とかを飛ばしてきたり、全身を闇で包み込んで圧縮してきたりと様々な攻撃をしてくるけど、何の効果も無いせいで若干涙目になつてる。

なんだらか、俺が悪いわけじゃないけど何故か罪悪感を感じる。やはり女の涙は武器という事か。恐ろしき精神攻撃。

「何なのよあなた！？弱かつたら食べて、強かつたら遊びまつしていたのに・・・接触すら出来ないとか非常識すぎるわよ！？」

「まさか妖怪という幻想的な存在に非常識と言われるとは思わなかつた」

「何言つてるのよ、妖怪は確かに幻想だけど非常識では無いわよ！」

え、幻想なのに非常識的じゃない？それはどういう事だ？確かに博麗大結界は常識と非常識を分けて、外界で非常識な存在になつた幻想を引き入れるという効果を持つていた筈・・・

まさか、まだ幻想が普通に息づいている時代なのか？といふことは俺は能力追加型トリップの他にもタイムスリップまで体験していると？

「なあ、今つて何時代？」

「え？ 何よそれ、ジダイ？」

え？時代がわからない？

「ここって何ていう国？どこの大陸？」

「クニって何よ・・・世界にはここ以外に大陸なんて存在しない・・・あ、そういうえば物凄く遠くにパシフィスって名前の大陸があったかしら？」

は？パシフィス大陸つて何処？

「じゃあ・・・ここ、なんて大陸？」

「ムー大陸だけど？」

・・・なんすと？

「いやいやいや何その展開！？ムー大陸！？何その伝説の地！？意味わからんねえよ！？助けてえーりん！？」

「・・・ふうん、何か面白そうな感じがしてきたわね。詳しく話を聞かせて貰おうかしら？」

俺はいつたいどんな世界に来ちゃったんだよ！？アライブか！？東方か！？神話級の古代世界か！？それとも全く違うファンタジー世界なのか！？

誰でもいいからこの状況を説明してくれえ！？

## 第2話　「この世界との世界？」（後書き）

パシフィス大陸も存在が確認されていない大陸です。  
幻想にも程がある。

どうも、幻の大陸に来てしまった俺こと神無用零です。レイと呼んでください。

何やら混乱して色々暴走している時にE.X.M.L.R.//アさんに興味を持たれてしまつたらしく、とりあえずお話しすることになつてしまつました。

一応お話を拒否しては見たものの、

「話してもううわよ?」  
「いや、それはちょっと・・・」  
「話してもらひわよ?」  
「あの、それは」  
「話してもらひわよ?」  
「はい」

といった展開になりました次第で。

うーむ、この割と流されやすい性格を変えられないものか。今まで何度も同じ様な展開で苦労してきた覚えがあるんだが・・・主に学校での掃除や作業とかで。

しかし流石に全部話すわけにはいかないよなあ・・・いや、いつそ平行未来か異世界から来たと正直に話してしまおうか?  
誰にも話さないよりは、誰か一人にでも話したほうが色々都合がいい事があるかもしれないし。

何より正直に話さなきゃいけない感じがするし。これだからカリスマオーラは困る。

「・・・というわけで気が付けばここに居た訳で」  
「へえ・・・平行未来かあ。そんなもの聞いたことも考えたことも無かつたよ」

異世界は何となく理解してもらえたが、平行世界の概念はまだこの世界には無いのか、はたまたルーミア（今は小さくなつてゐる）が知らないだけなのか言つても首を傾げるだけだった。

なので平行世界の説明から始まり、俺がここに来た経緯を説明した。平行未来の話について色々聞かれるかと思つたけど、ルーミア曰く「違うかもしないとはい、先に聞くと実際に見たとき楽しめない」との事で聞かれなかつた。正直助かつた。

・・・あれ？もう少女ルーミアなのに俺なんで普通に話しちやつてるんだろうか。別にカリスママオーラ放つてないのに・・・ああ何時も通り流されたのか。

「で、平行世界の場合未来にはこの大陸は無くなつてゐるのかー」「ここが俺の知つてるムー大陸ならね

しかしここがムー大陸という事は、さつき聞いたパシフィス大陸も架空・空想の大陸なのかもしれない。  
まあ両方どつかの大陸の一部になつてる可能性も否定できないんだが。

「じゃあ、今度は俺がこここの事質問したいけど、大丈夫？」  
「いいよー。面白い話も聞けたし、特別に何でも答えてあげる」

少女ルーミアかわええ。

ここ、ムー大陸について聞いた結果、様々な驚愕の事実が判明した。まず、神という概念が存在してはいるものの、神が存在した形跡は無くそれを信仰している人間は一切いないらしい。

一応この星に人間や植物等のあらゆる生物を作った神、つまり創造神が存在しているだろうと考えられているらしいが、これは単にそういう存在が生命を作ったと仮定しているだけとの事。

成程、だから概念だけが存在しているのか。

ちなみにルーミアは世界に光が生まれる前から存在している原初の闇から生まれたので、自分は神が作った存在では無いと考えているらしい。多分当たりだと思う。

次に、妖怪と人間は敵対している。これは妖怪が人間を襲い、人間が自衛するのだから当たり前の話だろう。

人間達は妖怪を『穢れた存在』と認識しているらしく、退治する時は靈力と武器を用いて容赦無く淨化』消滅させているらしい。俺妖怪扱いされないよな？

で、妖怪と少し違う存在として『悪魔』が存在しているらしいが、これは何処から現れるのかルーミアも知らないらしい。

海の向こうから来たのを見たことがあつたとの事なので、案外遠くにあるというパシフィス大陸に生息しているのかもしれない。魔界は無いのかね。

んで、さつき武器と言つたんだが、これがまたとんでもないらしい。というか人間の文明がどれくらい進歩しているのか聞いてみたら、既に現代レベルというトンデモ展開。なにそれこわい。

しかも神秘と同時に科学が進歩したせいで、現代人からしたら非常識すぎる程にエネルギー効率の良い機械等が普通に存在してゐた。いだ。

というか靈力を効率よく圧縮して放つ銃つて、ビームライフルか何か？まるでＧＳ美神の様だ。文殊使い何かが現れたら妖怪終了のお

知らせなんだが。

でも妖怪と日々戦いながら技術を進歩させてきたせいか、宇宙開発は全く進歩していないようだ。というかロケット飛ばしても墜落させられそうだしな。

そして妖怪の話。

妖怪達は種族の違いがあるものの、基本的には群れを成して行動しているらしい。そうしないと人間の超兵器に勝てないと。さつきまで居た魔の森（仮名）も妖怪達が人間から逃れるために作り上げたものらしい。

で、強力な能力を持つ大妖怪が群れの頂点に立つて小妖怪達を率いていて、そんな群れが複数あるとの話。全員結集しないんだろうか。ちなみにルーミアは妖怪の中でも破格の能力を持つていて、基本的に一人で問題ないのでぶらぶら散歩しているだけの生活をしているらしい。強すぎる。

というか何なの、能力が『闇と夜を統べる』ってどういう事なの？相手を原初の闇に溶かすとか何なの？夜に生きる妖怪達も率いようと思えば能力で簡単に従えられるとかどういうことなの？これが封印されて『闇を操る程度の能力』になるとか信じられん。そりや『程度』って言いたくなるわ。

というかまだ『程度の能力』って言わないんだな。

他にも色々聞いたが、目ぼしい情報はこの位だった。

ムー大陸が無くなつたのつて、超神秘科学でどつかに大陸ごと転移したからじゃないのかと思えてきて仕方が無い。

「で、レイはこれからどうするの？」

「そこなんだよねえ」

『無』の状態だと痛みも無いし怪我しないし、食欲も睡眠欲も多分

性欲も無いし、空腹にもならないのでこのままでいればどつにでもなりそうではある。維持に靈力を使うわけでもないから時間制限もなさそうだし。

無の弾丸は靈力使うみたいだけどな、試した時氣のせいかと思つてたけど、何かが減つた感じがしたし。

それはともかく、いきなりここに放り出された俺にはやることが無い。とりあえずはムー大陸を旅して回るつもりだが、それも終わつたら完全にやることが無くなつてしまつ。

パシフィス大陸に行こうにも場所がわからない・・・まあ探せばいいか。あ、襲われないなら人間の街に行つて色々見てみたいけど、大丈夫だろうか？

あと術者に会つて靈力の使い方を勉強したいし・・・あれ、意外とやりたいことが多いな。

「とりあえず大陸回つて、入れそなうなら街にも行きたいかな」

「そーなのかー。じゃあ私も付き合つよ。暇だし、一緒に居たら面白そうだし」

「いや妖怪が街に入つたら大問題だろ・・・見つかつたら大変だぞ」

「目撃者は食べればいい」

「いやいやいやいや」

結局街に入る時は妖力を抑え闇に姿を変えて俺の中に隠れる事になつた。実体が無いからこんなことも出来てしまつのだ。

それにも、少女に突つ込むのではなく少女に突つ込まれるとは俺も妙な経験をするものだ。

「変な言い回しはしないでね」

「ごめんなさい」

ともかく、こんな感じでルーミアと俺の珍道中が始まつたのだった。

面白いものが見つかるとこいけど。

### 第3話 A・こんな世界（後書き）

「JJJ」で紹介した設定は何の前触れも無く変更される可能性があります。

## 第4話 月の魔力

さて、ルーミアとの一人旅も始まって早くも一週間も経つてしまった。時間計算は太陽の昇った回数で数えた。

一応現時代での日付の数え方をルーミアに聞いてみたものの、そういった事には全く興味が無かつたらしく知らないと言われてしまつた。そんなんだからバカルテットとか言われるんじゃないのか。というか、ルーミアは自分が興味を持った事以外は全然知らない事ばかりのようだ。知つてゐるのも主に食に關してという、いかにもルーミアな思考。

原作のルーミアとの違いは、そこまで人間を好んで食べるわけでは無いという所か。好きではあるが、仕留めるのが面倒らしい。だから丸腰の俺が狙われたという事が。

まあそんな事もあり、ルーミアは狩りが異様に得意だつた。遠距離から標的のイノシシっぽい生物の影を操つて心臓を貫くとか避けようが無い。

操影術つてルーミアが始祖じゃないだろうな・・・始祖じゃないとしても、ルーミアのこの技を見た魔法使いが参考にしたとかあり得そうだ。東方で操影術見たこと無いけど。

「レイの能力つて何か応用出来ないの？」

ルーミアが前に拾つたという燃料切れにならないライターでイノシシ（仮）を焼いていると、そんな事を言われた。ちなみに実体化している。そうじやなきや食事出来ないし。

生存には必要無いとはいえ、食事は大事な娯楽です。精神の栄養なんです。

「応用？」

「うん、自分の実体を『無』くすのと、『無』の弾丸しか見たこと無いし。もつと色々出来そうな気がするから」

「色々かあ」

『無』で出来そうことといえば・・・無は何も無いって事だから、結界みたいなを作つたら外界からの干渉を全部遮断出来たりするんだろうか。・・・結界内部を全消滅なんて結果を引き起こしそうで怖いな。

無だから存在しないってのもあり得だから、何かをこの世から完全に消し去るなんて事も出来そうだな。物体は勿論、相当熟達したら概念なんかも消せるようになつたりして。

そいや『無理』とか否定的な意味合いも持つてゐるんだよな。なら正方向のベクトルを負の方向のベクトルに変換できたり・・・これは流石に無いか。可能だつたら『無と負』の能力になりそつなんだが。

「まあそんな感じで、色々妄想する事は出来るけど実現できるかはわからないって所かね」

「ふーん・・・試してみれば?」

「そうだな。色々出来た方が面白そうだし」

「そうそう、面白そうだし」

そんな話をしつつ、イノシシ（仮）は俺達の栄養に変わりました。この肉つめえ。

食後、草むらに寝転がつて寝よつとしている俺達。月明かりを浴びているとやわざわする感じがしたので空を見上げると、もう少しで満月になるであろう月があつた。

「もうすぐ満月だね。嫌だなあ・・・」

「ん? 妖怪にとつて満月は良いものなんじゃないの?」

月光を浴びて妖力回復とか、パワーアップとか、そんなイメージがあるんだが。

「レイが居た所ではそうなのかもしれないけど、ここじゃ大変なんだよ。確かに月光で力が回復はするんだけど・・・」

「けど?」

「満月の月光は力が強すぎて、その上狂氣を孕んでるのよ。人間も妖怪もそれに影響されて暴走したりして面倒で仕方無いの。私も多少気分が高揚するだけとはいえ、影響されちゃうし」

「それはまたとんでもない・・・」

「妖力も靈力も使った分だけどんどん回復するから、暴走した人間と妖怪が争いでも起こしたらとんでもない事になるわ。人間達は対策をとつてあるみたいだけど」

「妖怪は科学力で対策なんか出来ないしなあ」

「大抵は暗い森や洞窟なんかでやりすごすんだけど、馬鹿な奴は普通に外に出るから・・・全く大妖怪達もちゃんと統率して貰いたいよ」

ちなみににある程度の強さを持つた大妖怪なら、ちょっと影響される程度で済むらしい。月怖い。これが本当の月狂<sup>ルナティック</sup>って事か。この世界はちょっと物騒すぎると思う。月はもつとこう、安らぎを

「与えるような感じじゃなきゃダメだろ？ こんな月じゃ誰も月見なんかしない……え？」

「……あれ、どうしたの？」

「あ、いや、多分気のせいだけど……こっちの月って動く？」

「満ち欠けはするし昇って沈んだりはするけど、どれは違うの？」

「違う。こいつ、揺れるというか、増えるというか」

「気のせいじゃない？ 月ばかり見てるから目が狂つたとか」

「怖い事言つなよ……」

一瞬、黄色い普通の月と、それよりデカイ赤い月が見えたんだが……いくら幻想に満ち溢れてる世界とはいって、流石にそれはないよな？ 本気で目が狂つてたら困るからさつさと『無』になつて寝よう。

「ところでいつになつたら人間の街に着くんだ？」

「ん？ この大陸は妖怪と人間がそれぞれ半分ずつ陣取つてて、今私達が居るのは妖怪側だからまだまだ先だよ。向かつてる方向も妖怪側の奥の方だし」

「なん……だと……」

## 第4話 月の魔力（後書き）

ルナティック・ハイ！

事実かどうかは知りませんが、満月の夜は事件の発生率が増加する  
という話を聞いたことがあります。

そんなどこに住んでるから一次創作での月人がみんな嫌な人なんだ  
ろうか。

## 第5話 未来の危機

- - - 觀測開始

- - -

- - - 異物が  
四

- - - 現狀放置

後に再観測にて方針を確定

# 「声を聞く」能力の妖怪?

妖怪側が占拠している土地を奥へと突き進みながら会話をしていると、ルーミアがこの辺りに居るという妙な能力を持つ妖怪の話をしてくれた。

なにやら満州が近づくと『声』が聞こえるようになるという。その声は現在や未来の様々な情報を発しており、それによりこの先どんな事件が起こるのか予測するというのだ。

簡単に言えば使い勝手の悪い未来予知のようなものらしい。『声』から靠りこな情報で利用するのが大規模な事井ばかづら。

例えば未曾有の自然災害、例年以上の狂氣を放つ満月、大地震等。

それらの情報を事前に得られる妖怪はやはり重宝されるらしく、全

そりやそうだ。自分達の身を守る為の重要な情報をくれる相手を害する奴なんていないわな。

で、ちょうど満月が近いことだし、この辺りからだとすぐ行けると

の事なので行つてみることになった。

現在俺達が進んでいるのは木が密集している山の中で、このまま先に進むとその妖怪が住んでいる洞窟があるとの事だ。

「にしても、『声』ねえ・・・神の声だつたりしてな」

「うん、あいつ自身もそう考へてるみたいだよ。何か凄い上から目線な感じの声なんだつて」

「冗談で言つたのに事実の可能性があるとか驚くんだが」

しかし神ねえ・・・ここには創造神しか居ないみたいだから、その声なんだろうか。なんだつこいつの、オラクルつて言うんだつたか？神の言葉を聞く事つて。

これが事実なら結構凄い能力なんじやないだろうか。八百万の神ならともかく、創造神だしな。とんでもない情報が手に入りそうだ。

「ついたよ」

「これはこれは・・・普通の洞窟だな」

「変な洞窟なんかに誰も住まないでしょ」

「それもそうか」

どこからどうみても普通の洞窟だつた。入口に変な結界が張られるとか、ダビデの星が刻まれてるとか、門番らしきゴーレムがいるとかそんな事は全く無い普通の洞窟だつた。

神の言葉を聞くなんて凄い能力を持つてるんだから、周りが神聖視してもう少し立派な所に住めるんじゃ・・・と思つたけど、これは人間的な考え方か。妖怪はそこまで神を重要視しないわな。その上神が存在するかもわからないつて前に言つてたし。

ともかく、何か凄い事件の『声』が聞こえていか尋ねるために俺とルーミアは洞窟へ進入した。

・・・あ、俺これから初めてルーミア以外の妖怪とともに話が出

来るのか。雑魚妖怪はよく遠目に見かけたけど、会話は出来なかつたんだよな。ルーミアを怖がつてたみたいで。

洞窟は案外深くなかつたらしく、すぐに生活観を感じる場所に辿り着いた。

しかし暗い。入口が近いから多少の光が入つてきてはいるが、それでも奥の方は暗くてよく見えない。

というか、その『声』を受信する妖怪は何処に居るんだ？

「ねえ、何でそんな隅っこで震えてるの？」

ルーミアが目を向けている場所に目を凝らすと、明りの届かない部屋の隅で蹲りながらガタガタと震えている、牛の様な角や耳・体毛を持つ青年姿の妖怪が居た。

牛と人間が混じつた姿で、重大な事件についての『声』を聞いて予言として伝える・・・まさか、件の妖怪だらうか？

昔何かの漫画で読んだで知つていたのでそう推測したが、件つて生まれてすぐ死ぬものじゃなかつたっけか？・・・いやそんな事は今はどうでもいい。

嫌な予感がする。件の予言は絶対。なるほど、現在か未来かはわからぬが、創造神が言う事なのだからほほ確実なのだろう。もしかすると創造神自体がその事件を起こしている可能性すらある。

そんな能力を持つ妖怪が、何かを恐れているかの様にガタガタと震えているのだ。明らかに嫌な予感しかしないというもの。

・・・聞いてみるか。

「始めてまして、俺はレイだ。よろしく」

「・・・あ、ああ。カタリ。カタリだ」

話しかけてようやく俺達に気付いたのか、何かに怯えながらも自己

紹介をしてもらえた。

どうやら恐怖はしているが、そこまで精神が追い詰められてないのかもしれない。

「で、だ。一体どんな声を聞いたんだ？そこまで祛えてるって事は相当やばいのか？」

「今までのも結構酷いのがあつたけど、カタリがそうなつてるのは始めてみるよ」

「・・・終わるんだ」

「・・・こりゃ、とんでもない展開が待つてそうだぞ。

「もう少し詳しく話してくれ」

「」、今回聞いたのは、おそらく数百年くらい、未来の話だと思つ。神を名乗る奴が、『この星の生命を一度処分してやり直す』って、言つてたんだ・・・」

「へえ・・・それは、確かにとんでもないねえ」

ルーニア、なんでそんなに楽しそうにしてるんだ？・・・いや、それはともかくとしてだ。

生命を処分してやり直すとは、明らかに神視点の発言だな。これが何百年後の神の発言なのかはわからないが、結構やばいのは確かだ。しかし数百年後か・・・俺つて生きていられるのか？『無』が死も老化も『無』くしてゐたら生きられるだらうけど・・・どちらにしろ人間の俺には気の長い話だ。

でも、既に何百年・何千年と生きている妖怪達には俺ほど長い時間には感じられないんだろう。だからこそ、このカタリは祛えているつてわけだ。

仕方ないわな、神が世界を終わらせるつて決めた事を知つちましたんだ。どうせ死ぬからとつて自暴自棄になつて暴走しないだけマ

シカ。

「神かあ・・・ねえ、妖怪達で神を殺すって、面白やうじやない？」

「そんなこと考えてたのかよ・・・」

「だつて、面白やうじやない。神殺しだよ？」

今は少女姿とはいえ、流石凄まじい力を持つてる妖怪だな、ルーミアは。発想がとんでもない。

でも、神殺しか・・・可能性は無いわけではないのか。『声』では実行しそうとしている所みたいだし、その後の結果はまだわからないしな。

「神を殺すんなら妖怪だけじゃなくて、人間とか悪魔とか全員が協力しなきゃ無利じゃないか？」

「そう?でも悪魔は詳しく知らないからともかく、妖怪と人間が協力なんて無理じやない?」

「俺とルーミアが仲良くなつてるとか、やつてやれない事はないと思つぞ」

「うか?」

まあこんな会話をしてはいるけど、実際神殺しなんてとんでもない事がそう簡単に出来るわけが無いだろう。

どこかこことは違う世界でも作つて非難した方が安全・・・あ、でも神から逃げられるんだろうか?

「ともかく、今までで一番危ない内容だよね。妖怪の群れの長には伝えたの?」

「つ、伝えた。次の満月が終わつてから北の山で会合をするから、来てくれと言われた」

「そう、じゃあまた今度来た時に会合の結論を教えて」

「あれ？ルーミアはその会合に参加しないのか？」  
「私は妖怪を統率してるわけじゃないから、別にいいんじゃないかな？」

そんなんでいいのか？と思つたが、まあルーミアがいいと言つていいのだからいいのだろう。気にしないことにする。

それにもしても、神ねえ・・・俺がここに飛ばされて、神が生命を一掃しようとしていて・・・まるで俺が主人公の漫画か何かみたいな展開だな。

まさか俺が神殺しのキーパーソンになつたりする事はないとは思うけど、何か作為を感じてしまう。

・・・生命を一掃しようとしているのは自称神で、それを止める為に本当の創造神が俺をここに呼んだとか・・・いや、これも無いか。大体俺は主人公タイプじゃないんだ。『無』なんて能力は大抵敵キヤラだろ？。中二病な作品なら主人公足りえるけど。

まあどちらにしろ、俺がその時まで生き残れるかどうかだな。老い死なないなら能力の訓練をして、いつかくる終末に備えてみるか。神を『無』に帰すのは不可能だとは思うが、神の影響を『無』くす事は出来るかもしれないからな。

「なんか俺も楽しくなってきたかも」  
「そうそう、楽しまなきゃ損だよ？」

さて、ムー大陸の未来はどうなるのや？。

## 第5話 未来の危機（後書き）

何これ東方？  
はい、東方です。

## 第6話 行き倒れ悪魔

とんでもない危機が未来に待ち受けていると知つてから数日。

危機とはいえ何百年後という規模なので俺とルーミアの旅に特に変化があるわけも無く、様々な妖怪と出会つて雑談してみたりと平和にムー大陸を歩き回つていた。

旅の途中で満月の日を体験したが、確かに月光の当たる場所は何だかよくわからないパワーに満ち溢れまくっていた。

ただの野生動物も雑魚妖怪並の身体能力を持つて暴れまくつていたし、たまたま遭遇した雑魚妖怪も理性がぶつ飛んでいてアホみたいな行動（ひたすら月に向かつてジャンプ）を繰り返していた。

幸い俺は『無』の能力のおかげか月の影響は受けなかつたが、ルーミアは妖力を持て余して大人形態になつて余剰妖力を撒き散らしていた。

満月の影響を受けたのかルーミアは熱に浮かされている様に顔を赤くしていて、大人形態の美しさと相まって正直色々とやばい事になつてた。なんか工口いんだよ。

まあ思考能力や行動に影響が出るほどではなかつたらしいのでそのまま旅は続けていたが、満月の度にああなるのかと思つとちょっと不安でちょっと楽しみだ。

そして現在居るのはムー大陸の最西端。ここにルーミアは悪魔が飛んでくるのを見たらしい。

ちなみにムー大陸は西側半分を妖怪が、東側半分を人間が占領しているらしい。いつか最東端にも行つてみたいものだ。

「で、悪魔つてどんなの？」

「えつと、あんなの」

「は？」

ルーニア（今はもう少女形態）が指を指した方向に田を向けると、何やら行き倒れっぽい感じに倒れている青い髪の少女が居た。うん、悪魔っぽい羽が生えてる。でも悪魔らしいのはそこだけで、服装は普通に可愛らしい赤のワンピース。

これが悪魔なのかと突っ込みたくなるが、東方っぽい方向性で考えれば十分に悪魔な外見だろう。しかし悪魔が行き倒れとは、なかなか珍しいものを見た。飛んできて疲れたんだろうか。

「とりあえず、あの悪魔どうするよ？」

「食べる？」

「俺は流石に冗談だと判るが、そういう判りにくい冗談は止めた方がいいぞ。ほら、悪魔が地面を這いながら逃げようとしてる

「つまんないなあ」

冗談と判ると悪魔は崩れ落ちた。無駄な体力を使わせてしまったようだ。

ま、とりあえず助けてやることにしようか。旅は道連れ世は情けつてね。

「ふう、助かりましたあー」

と、いうわけで悪魔少女を助けてやった俺達。

倒れていた原因が空腹という情けない理由だったので、俺が旅の途中で作った保存食（ただの燻製肉だが）を分けてあげたのだ。

理由が理由なので恥ずかしそうにしていたが、空腹には耐えられなかつたらしく大人しく燻製肉を食っていた。

「でも、なんで空腹で行き倒れなんてしたの？」

「えっと、私はパシフィス大陸から飛んできたんですよ。で、途中で悪天候に見舞われて食料落としちゃった上に、進行方向を見失つて迷つてしまつてー」

「成程、何も無い海上で迷子になつて何も食つてなかつたのか。海の上なんだから魚でも取つて食えばよかつたのに」

「魚は苦手なんですよー」

だからとつてそれで餓死なんてしたら恥ずかしそうだと思つんだが。

「ところで、パシフィス大陸つて悪魔達が住んでるんだよな？」

「はいー。こっちと違つて人間もいませんよー」

「へー、ちょっと行つてみたいかも」

「道に迷わなければ1日飛べば行けますよー」

1日飛べば着く距離で、悪天候に見舞われて大変だったからといって空腹で倒れる程まで道に迷うとかどういうことなんだろうか。そんなことを考えていると表情に出ていたのか、こっちを見た悪魔少女に「た、たまたまですー！」とか色々弁解された。

どうやらこの悪魔少女は、悪魔達のトップのお使いでここまで來たらしい。

お使い内容は「『声』を聞く妖怪に何か重大な事件の『声』が聞こえて無いか聞いてくる」というものらしい。

「なんでも前に一瞬、月に妙なものが見えて、嫌な予感がしたかららしいですー」

「ふーん。あ、カタリの聞いた『声』なら私達も教えてもらつたか

ら、教えてあげるよ

「あ、ありがとうございますーー！」

なにやらルーミアと悪魔少女が話しているが、俺はそんな事を無視して今聞いた情報に驚いていた。

悪魔達を纏めているという存在が月に見たといつ、妙なもの。

気のせいだとは思っていたが、俺も少し前に一瞬だけ巨大な赤い月が見えたことがあった。

俺が見た赤い月。悪魔達のトップが見た妙なもの。そしてカタリが聞いた未来の『声』。

なんだろこの展開、まるで何かの物語のような流れだ。しかも俺が主人公的な立ち位置の。

いや、もしかしたら主人公の立ち位置には他の人物が居るのかもしないが、この流れだと俺も結構重要な位置に居る人間だろう。何せ俺と悪魔のトップが見たものが『月』という部分で共通してい、俺は満月が放つ狂気を無効化できるのだ。

まさか神が生命を抹殺する時に月を使うんじゃないだろうな・・・

というところまで考えて、考えるのを止めた。

いかんな。こんな妄想としか言えない様な事を考えるなんて、まるで空想に浸つて変なことをしている中一病患者じやないか。

・・・何だか疲れてしまい、思いつきり深く溜息を吐いた。

「というわけでレイ、パシフィス大陸に行くよ」

「話を聞いてなかつたから何がどうなつたのかわからないんだが・・・

・まあいいや

「道案内はお任せくださいー」

真っ直ぐ飛ぶだけですけどねー、と言つて悪魔少女は飛び上がつた。それに続いてルーミアも飛び上がる。

んじや、俺も・・・おつと。

「ちょっと待つた」

「ん? どうしたの?」

「何か問題でもありましたかー?」

「重要な問題だ。これを何とかしないと大変な事になってしまひ」

二人ともきょとんとして首をかしげている。

ルーミアはともかく、悪魔少女はこの事に気付かないと大問題なん  
じやないかなあ・・・と苦笑してしまつた。

「食料がもう無いから、調達してからにしよう

## 第6話 行き倒れ悪魔（後書き）

悪魔の名前考えてないや。

でも真名明かすのも無理だらうか、ひじりもこいよね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3540k/>

---

東方無人譚

2010年10月9日17時15分発行